



スポーツボランティアプログラム「事前学習Ⅱ（障がい者スポーツ）」

7月16日（土）、スポーツボランティアプログラムの「事前学習Ⅱ（障がい者スポーツ）」を実施しました。17名の学生が参加し、連携団体である東京都障害者スポーツ協会の横田さんと佐藤さんに講師をご担当いただきました。これから始まる障がい者スポーツのボランティア活動に向けて、貴重な映像も交えながら具体的な知識や技術、大切な視点等について学習しました。

前半：講義

前半の講師を務めてくださった佐藤さんからは、障がいの種類が「身体」「知的」「精神」の3つに大きく分かれていることや、障がい者スポーツの起源が戦争で負傷した兵士の身体的・精神的リハビリテーションにあることなど、障がい者スポーツの基礎的なお話がありました。その中で、最初にスポーツをリハビリに取り入れたグッドマン博士の「失ったものを数えるな。残っているものを最大限に生かせ。」という言葉が紹介され、学生たちはとても印象に残ったようです。

また、東京都障害者スポーツ大会で行われる15競技とそれぞれのルール等について説明がありました。その中で、健常者が行っているスポーツを、どうやって障がいのある人たちも行えるようにするか、障がいの重い人でも参加できるような平等性をどう実

現するか、といった点で様々な工夫がなされていることを知り、障がい者スポーツという特別なものがあるわけではなく、一般のスポーツをルールや道具を工夫することで障がいのある人も楽しめるスポーツになるということを知りました。障がい者スポーツが果たす役割や意義を実感できる講義でした。

後半：実技

後半からは、横田さんに講師をご担当いただき、このプログラムで実際に関わることになる競技についての詳細な説明と、そこで接する競技者の方の障がい理解や向き合い方について実技も交えて学びました。

視覚障がいのある方が普段感じている困難を、学生たちが疑似体験する時間が設けられました。右の写真のように、アイマスクをして視界を真っ暗にし、ペアを組んだ相手の誘導に従って道を歩く体験です。視覚障がいのある方の立場に立ってみるだけでなく、そのような人たちに対して、どのような声かけやサポートが有効なのかを学ぶことができました。学生からは、「目が見えなくなるだけでなく、バランス感覚も危うくなった」「不安や恐怖を感じた」といった感想が挙げられました。

講師からは、視覚障がいや知的障がいのある方に対する案内方法の例の紹介と

【活動報告】 スポーツボランティア プログラム 「事前学習Ⅱ (障がい者スポーツ)」

2016/07/16

同時に、「障がいのある人もない人も何も変わらない一人の人間であること」「一人ひとり求めている方法も違うため、とにかく何でも本人に聞いてみることに」「できないこと、嫌なことは、はっきり分かりやすく伝えることも大切」といったお話がありました。

学生にとって、障がいのある方々をサポートするにあたっての大切な視点を学ぶことができた講義でした。

ここで学んだことを実践する場として、9月14日に開催される「スポーツの集い」を皮切りに、以降、実際のボランティア活動が始まります。



視覚障がいのある方の案内練習

講義では、座学のみではなく、視覚障がいのある方を誘導する練習も行いました。視界が健常者よりも制限される、弱視の方の視界も体験しました。講師から「視覚に障がいを抱える方は、立体的に物を見ることが難しい」という説明がありました。